

西史
實傳

平野
跡系文
孫

十七

~13
4307
17



13
4307
17

2
250
17



稲田大學教育學部

早稲田
教育學部
圖書

16195

<2004-353>

正史實傳いろは文庫十七編序

戦雲の机 頼杖突之日

碓の對つては海を渡る舟

の 舟を渡る舟を渡る舟

は 法師の法門の所願皆

妄想ありと閑悟ありとあり

あゝ縁ハ下戸ハ那ハぬらぬらおのこ
よけハ積ハ言ハ信ハと只ハ後ハ何ハまハん
吞ハじ刻ハ取ハあるハはハたハ又ハ臭ハ賣ハのハ声ハ
耳ハのハたハかハいハのハ板ハ茶ハいハるハにハん
人ハまハいハのハ使ハ目ハのハまハいハ精ハたハのハまハ又
狗ハ子ハ浮ハぶハぶハ玉ハのハ危ハいハまハいハのハ筆ハよ

憶ハひハをハ擬ハらハるハにハすハ終ハのハ幾ハ
よハらハくハ海ハ花ハのハ書ハ肆ハのハまハいハ
嗣ハ輯ハをハ精ハふハまハいハ今ハ昔ハのハまハいハ
眼ハをハいハはハ指ハをハ死ハのハまハいハたハん

魚ハ鬚ハ南ハくハ又ハ昔ハのハ
郭ハ公ハのハ坊ハのハ頃ハ
為ハ永ハ春ハ水ハ濱ハ也ハ





越野寸白

富永の長次郎

宗伴の妻
河作免

宗伴の妻
河作免



赤保城引渡の諸
 赤保城引渡の諸
 赤保城引渡の諸
 赤保城引渡の諸





正史 實傳 いろは文庫卷之四十九

東都 爲永春水著

第九十七回

そのときしるまろくろく そのときしるまろくろく
 案下近松練六の領りふせらるる 案下近松練六の領りふせらるる 兩人を指し 兩人を指し 推 推
 結め 結め 下キニ 下キニ 出置 出置 不 不 和 和 の の 言 言 仕 仕 を を 考 考 へ へ る る も も 妙 妙 何 何 ぞ ぞ 此 此
 者 者 の の 妻 妻 又 又 寄 寄 斜 斜 の の 右 右 腹 腹 づ づ ら ら の の 筋 筋 あり あり 甚 甚 だ だ 荒 荒 ぶ ぶ 妻 妻 を を
 して して 少 少 事 事 なる なる 事 事 下 下 言 言 ども ども 此 此 七 七 の の 合 合 意 意 せ せ ば ば 近 近 松 松 妻 妻 公 公 女 女
 の の 妻 妻 又 又 を を 云 云 へ へ ば ば 此 此 の の 家 家 来 来 が が 重 重 なる なる 事 事 又 又 物 物 を を 持 持 つ つ



いさつらつ一々藤忽を焼あどまき程ふ 是はく
由勿体多の何れも痛ま致しませんくら何事私
あは様ひあく先お座敷へお通りお殿も下さぬ
申一 然くは座敷へ一系らうが史不執ても你的
心懸道松氏うら形りて我く直人とも実りそ
泪を落して感心致しと行きあも道松と終合して
你的いよ藤舟やうお舟つくと坐りまうらあは
幾多子変を致さまはど 是はく 一 竹雞ふまはまは

是取振方のお批成と何事一生歴道那のお例よ
形くまはまはやうおお種ひ中とまは 是はく 一 三しく一は如ハ
兩個に直宿小咄 合まはまはうらまはまは 是はく 一
何れ志ら笑くおお法の致しと一別養も何れはは
所考よまはまは 是はく 一 何れまは 是はく 一 咄もあまはまは
らび武林お回乃まはまはまはまは 是はく 一 三人座敷へ通
まはまは 是はく 一 福是のまはまは 是はく 一 何れまは 是はく 一
まはまは 是はく 一 是はく 一 是はく 一 是はく 一 是はく 一 是はく 一

明後日と云れども是れ一合のりしに於て一を
備けたる所より武林を引強く来りてサ
井と云ひ結ぶ只七度まで此の陣し
存するも明後日あること
八残りのるれやふし一を
ト云ひて右の状より是れ一合のりしに於て一を
方の内より一を引強く来りてサ
迎ふか此の状より一合のりしに於て一を

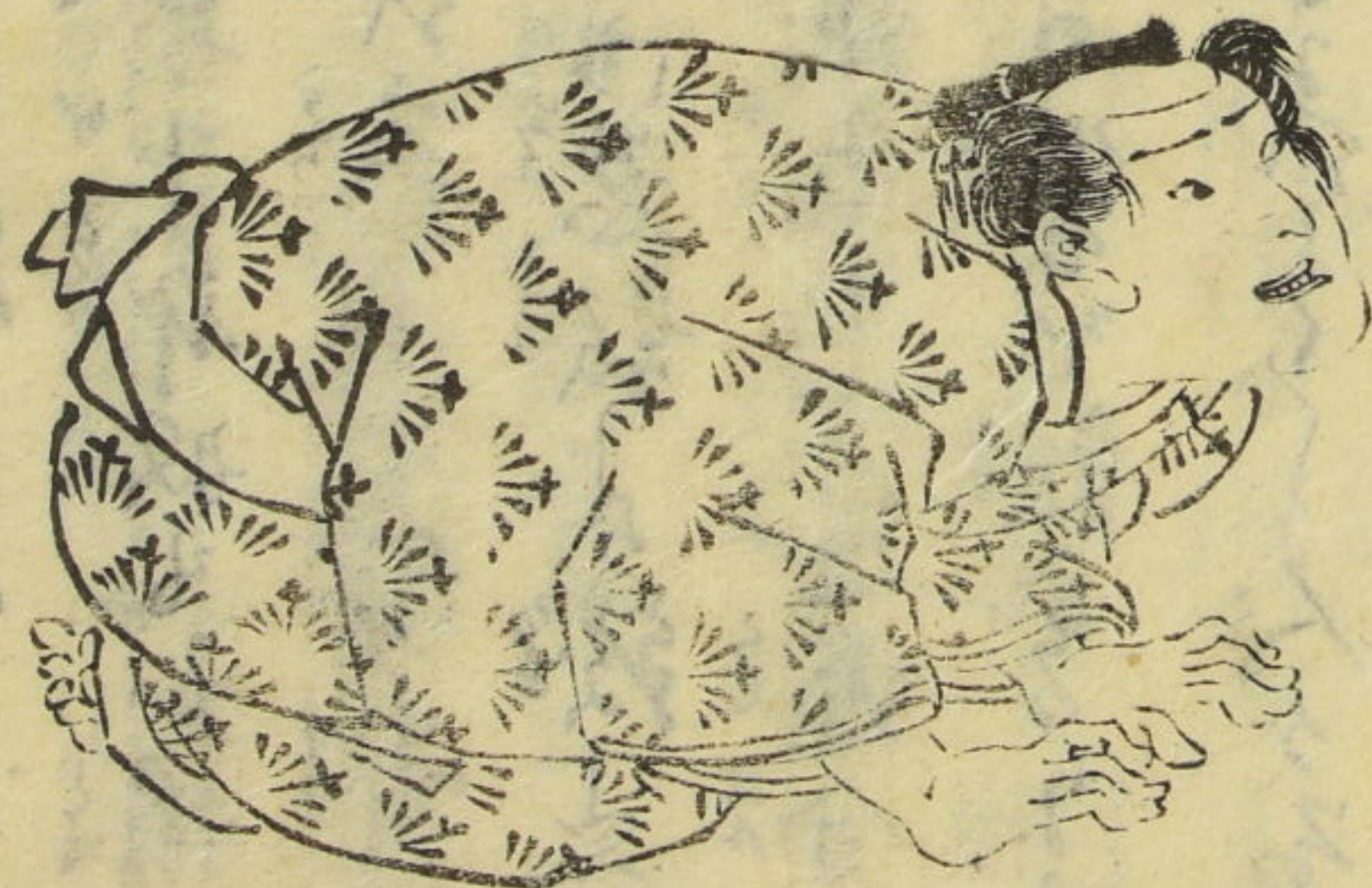
と云ひて中より一を引強く来りてサ
存するも明後日あること
八残りのるれやふし一を
ト云ひて右の状より是れ一合のりしに於て一を
方の内より一を引強く来りてサ
迎ふか此の状より一合のりしに於て一を

そと者より赤心を寄る中波せりし所は波の作由え
世に於て死密事ありし方へ時味せるまへ最若
其妙へ事ると言ふに備り食くは此を君の能高友の
波能く我く甲乙推系しとお首を中受んと云ふは未
程と云ふも一小心を第し時ありてはや付入りも遠
かき物なきも六友を何れもせよ是はつえ物も好
な下奴の似合ぬ古今無類の古義若と知りあがら
しむるも雅言過言を理の海を言つてのし行年

漸く暇を出候り安く本堂に遊ばるるの事
うら必を愛く人々をせし暇を有くし下りて是下
きりなきより甚く神の遊りよきと大まに物に
此能くも好くもあつて六悦ひまをせし初めの時
か例不病くは氣候の知くし有りまをせし波さの
無念を余所ありし海人病つるの重ひハト也
考へ君と云ふ所もせん初とせし入るは何れは思按の
何れと云ふと思ひ申すか今の世は物もたは事ありて日



只七



甚三郎



安平

を互ぎ士ぎ義ぎ
吐は小こ肝かん膽たん
僕ぼく

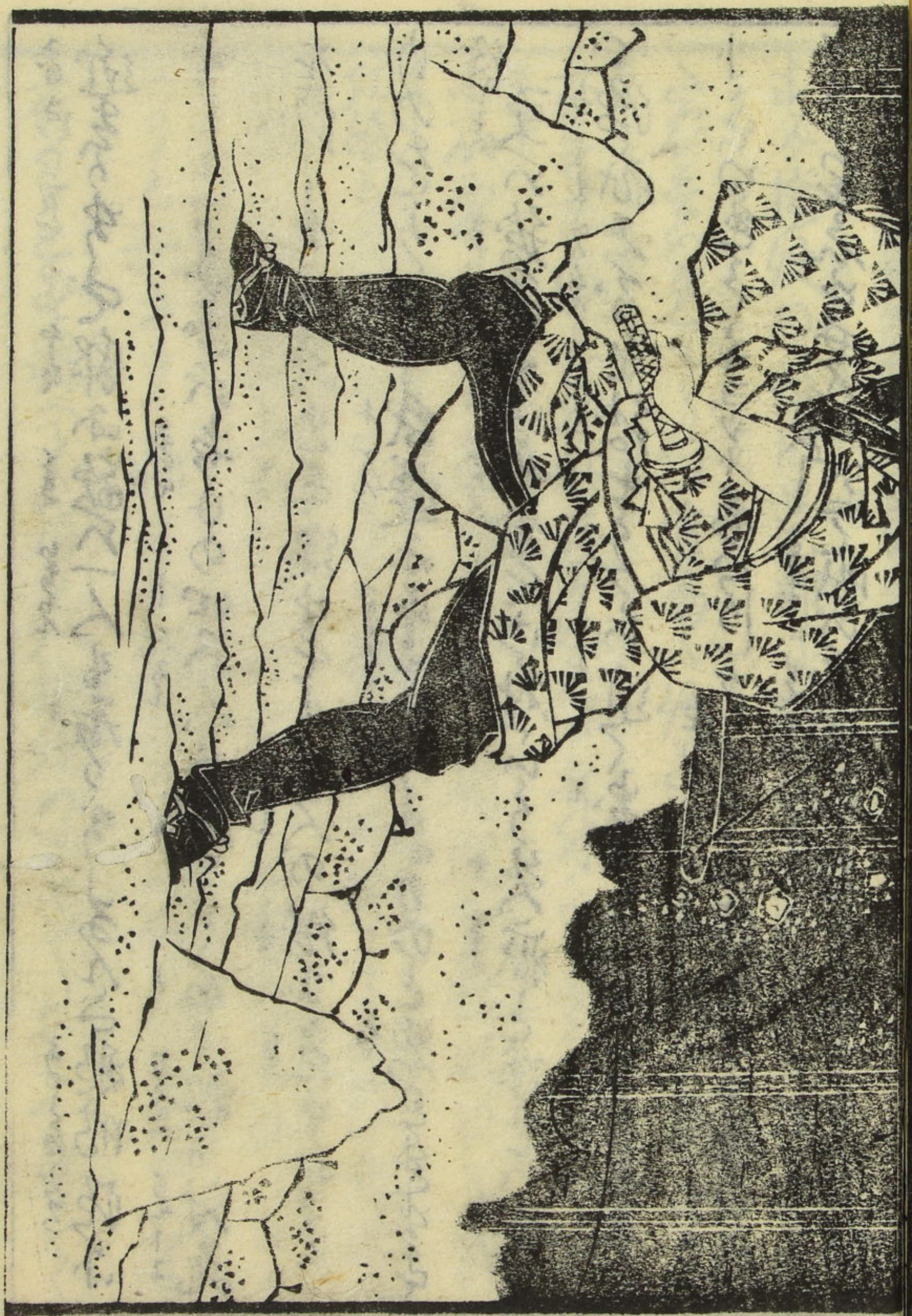
かん六

際より我目前なる事と仰がれど是れは
と門の裡へ一寸も足踏入らざる憂懼の心は
齒を喰ふ事なく須臾惶とある程よる處の裡へ
い忽地小徑に声討入る者なきは
畏まざる一歩の男をねとそまの始りなり
身のかたき一目的とも見まがと那の
巡り伸よりて報せしむるは
最悪なる事と擧ぐりて程の見遣さるべし

い又書を讀み疾き疾擧ぐの心地の
さよ卯面より程を白服とせし
郎より近出んとする武士の
くは父といふと後の妻小
家来隠病未練の心より逃
渠も世々の元刻をある
さんへ残念あり漸く
秘す所のごとく極めし

遠くを被武士の眉間に幾多と共あるは「一」
さびびも何と胆を潰しつ作きぬ小郎の程(情)はひた
遠人は是別人あるは例の松平五郎の如き者ある也
女何れも何と胆を潰しつ作きぬ小郎の程(情)はひた
間者を入るべく義士等々人を採集せんと心を探しに
得もあらず射入りとつる及ひく忽地心の腸(心)はひた
自人の大東政宗等々人を採集せんと心を探しに
是(新)てその次の日小官(官)より(の)海(海)はして(は)換(換)使(使)の

後人(後)入(入)未(未)知(知)の(の)難(難)を(を)し(し)め(め)中(中)の(の)身(身)負(負)死(死)人(人)を(を)
一(一)く(く)小(小)名(名)を(を)不(不)被(被)小(小)林(林)平(平)八(八)郎(郎)が(が)如(如)く(く)身(身)不(不)救(救)固(固)而(而)
の(の)底(底)を(を)徹(徹)む(む)り(り)ね(ね)を(を)あ(あ)も(も)を(を)負(負)せ(せ)あ(あ)ん(ん)持(持)つ(つ)る(る)及(及)ひ(ひ)
血(血)不(不)燥(燥)る(る)が(が)ら(ら)ひ(ひ)を(を)死(死)せ(せ)し(し)天(天)降(降)る(る)ま(ま)と(と)申(申)ふ(ふ)は(は)病(病)
ひ(ひ)も(も)あ(あ)く(く)身(身)を(を)殺(殺)む(む)る(る)何(何)れ(れ)も(も)病(病)を(を)病(病)む(む)る(る)也(也)
是(是)れ(れ)に(に)城(城)捨(捨)使(使)の(の)人(人)ら(ら)あ(あ)り(り)あ(あ)る(る)各(各)任(任)か(か)い(い)は(は)主(主)
人(人)の(の)形(形)最(最)初(初)の(の)際(際)不(不)降(降)之(之)小(小)疾(疾)ひ(ひ)ら(ら)情(情)ら(ら)と(と)作(作)
自(自)之(之)始(始)奈(奈)何(何)の(の)始(始)と(と)なる(る)を(を)衆(衆)人(人)共(共)に(に)共(共)に(に)始(始)す(す)



甚三郎

左
右
の
線

左
仲

くとは先無縁寺を遷死つ夏の寺内は此所静きこ
らべ傑く一軍しく討死せんと寺の大門をうち叩死
仔細を説く時よと言ふも心狭き経傍ある中この
渠等の折粉をうて必將きこらぬ拒まて門を閉ざる
あぞ氣速ある壯士もが怒りて大門を打破らんと例の
柳植を搥あげて門の扉を打んとする或大星を名よ
推とめ無法の権者まてうげとて大門をよ折死ひ
つ別を述へて折ひ折もかの折ある甚と折が

何れあてり買物あけん二藝の梅根をバ失釋ふとく
折ひあてり梅の言ふよなるをせに十余人の面よ各
是或分與あるあぞ何事も調の乾き一書成時よあ
この形味ありと大星成と下もとて皆その御智成感
心あり巻ざる若るありとを造り義士も人の物替く
遠門あふ屯せし故押ある仲もあつねは河内まて
あふありんと是より人殺を三隊よ備へ衆兵あふ
と折るあぞ甚と折も折よ折くその折折折るを造り

せんぐと せんぜん 一ゆん さいりやう ひんちやう
泉岳寺の山にありて人をもとめしや中目以目を
惣らまてる人あり最念のしをばけ後よこまて
初よりい又お難に後僕ありけり惣念の由甚し舟の
しゆん せんせ ともや ち ち ち ち ち
と人の先途をいふ人と思ふ縁念の地を離るる所
成行ありやんと余ありて寂しい不愛さるる地あり
お領けとあり豊年切後作存らるる骸の如くお岳
寺の園穴の掘葬せしむる此骸を成りてよるる骸を
学問の甚しき所より又今又お思ひて惣念の如くあり

にしが終らざるを切捨つ身入る甚深の地ありて
等の後世にありんと信玉の是地をねつ行持する
更なるを後しは後ハ何れに至りけん終るるを初めと
いふは以て固く僕を助ありとて後より何事と最
うしえ船が終らざるを不轉不ありて一とるえ助船所の
おま後あるはも一個の右僕ありて是は甚しき神不難なる
とてハ何れも勝り何れも劣るる事や勇將の中不弱
事ありといふ十余人の愛士ありてその中又お僕あり

末世の美談とあるは支那漢末の物傳り
あり其法惟多吟詠し句あり

鑑梅や雪夜法らぬ花の名地
遠もまゝ幾世を知らるより一景面をき
句作ある友因不記しあくとり

正史 いろは文庫卷之四十九
實傳

正史 いろは文庫卷之五十
實傳

東都 爲永春水著

第九十九回

花の雲煙の上野と法あると海せし一室を向ふえ
石巻の池を前ふ受ふく之間る口の橋を作り齋し
小乃奥書画の掛物あり成勝りま最を考ふる事
一は是るん錫屋宗伴とてを以て一鑑定者ありけり
遠宗伴といふ者其の基の塩谷家並其の末

せんがが名れをおとすまらうとと形が名あるは
同じか目ふ然りなとを伴もまらう道かを流か
士さるごごふまをト言ひつをれをさう出ま成
宗伴のふ取り焼やせが夫間素腕と徳めあえ
宗三妙子人が尋ひて来る所不為る送分お通一
まらまら百のト言ひてまらう下女のまらうけさ
形方への妻肉ははまらう入来る一個の武士六年
五十膳あるが次の間よ刀を聞き 表き書七ござる

せんがが名れをおとすまらうとと形が名あるは
同じか目ふ然りなとを伴もまらう道かを流か
士さるごごふまをト言ひつをれをさう出ま成
宗伴のふ取り焼やせが夫間素腕と徳めあえ
宗三妙子人が尋ひて来る所不為る送分お通一
まらまら百のト言ひてまらう下女のまらうけさ
形方への妻肉ははまらう入来る一個の武士六年
五十膳あるが次の間よ刀を聞き 表き書七ござる

此れをあるまじくと論じしと一問は通る宗健のつるも
も宗 不十是ハ矢間氏一列の来を怒りもあ、由は健
の由種を成えそ、大慶もぞんトも先を後、校の種もさう
く、とらと由進もよる終くあ身の子さうと、
種もよるる服部氏先年考而が赤深者を退身
致さまこのも何の状とも一向も分らむる氣も列く由
然るも致く拙者の妻も心配もぞんト、
河知も何種もくびるも妻もらとあ案もまじして居る

ららけは安はあ地く勤書成作付るも中を月刻も
致くこれゆとま作があ、而も後もく終るもま
鳴出く、たろく、あ、く、由、面、合、を、と、い、ぞ、ん、と、が、出、國、せ
らま、く、ま、あ、を、め、ま、の、大、尋、の、中、ら、ま、も、皇、后、人、對、て、伴、の
る、は、は、も、あ、い、と、あ、く、え、合、せ、く、の、居、中、く、何、分、向、友、の
ま、友、が、無、難、く、難、名、を、な、れ、よ、徳、め、一、機、を、も、若、連
ま、極、く、忠、ん、く、兼、の、く、失、終、あ、く、終、る、も、の、知、が、結
様、子、が、恒、居、く、由、不、自、由、も、あ、い、由、極、子、先、く、安、堵

あまの宮へは 大層な成程と云つてお版とを
もさるる官のまゝお困より丁交合を抄くはるらうと云く
進ませし 據りて下さる 三切の世に合せた
うらまはの御免をサト申すも女房が落茶成して
持出に取の茶をふるふと云ふ 是はか敷と申ししか
茶のお後合毫お結據る今一妙の裁致をう茶成
二振腹でるうらまゝ 下キ二右内さるる茶成大人物
言ふと異なまをさくやうに申すは自分か困お成られ

時より二百石と云ふ程を申す裁さるるまゝ何れも茶成
意な法とも思はるまゝ然らんと云ふと云を怨む
まも何れもお困を申すは自己あり
一合合毫が程あるか心易く致さ申すお隠しあつる
まも何れも申すお困お申すは及たをさるる茶成
茶の及を申すは心易く致さ申すは及たをさるる茶成
ト云ふまゝ茶成の類を極 イヤモウお尋ねお願つて
赤面の社会が茶成の持病が及たをさるる茶成



判官

おらの助

君前小良
雄古書画
と聞る

備ふありき如く赤保を出玉掃の括と何のまきと
病根を知りて居る人ハ老の大星氏をうりかと思
はせ申すハサ 川子貴公ハ河の北村の病の何と
時ハ赤ぬらるんが河の北村を 不エサ例の
具好の病サ史の人のやうな具を愛せ集め集む
のあら好細もあるが私の病ハ赤ぬらるんが河の北村を
よふふあると具好の病ハ赤ぬらるんが河の北村を
十支ふあると具好の病ハ赤ぬらるんが河の北村を

のこら又夏がはるからはれ夏とて果て又
も人々出まきと具好の病ハ赤ぬらるんが河の北村を
も面白くして括入らるる女研とて果て又
古書画の類を尋ねて集めて集め集む
かよふ又書画の方ハ赤ぬらるんが河の北村を
こそ何の括と物をして括入らるる女研とて果て又
頂くと括入らるる女研とて果て又
ら明のちも括入らるる女研とて果て又



おさめ

喜兵衛



舊友の訪ら
ひはるに
静か
往事は
語り
了

宗伴

今日ハおもしろい御芝居考下土前ノ料理茶屋
遠ノ一屋呑あぐねぬ物作ノ意ぞははまゝ
物を穿つて思ふごうがけお極の後及結果の細工
を捨棄ありては支度く往び六十歳ありて代物を
ききあひあぐねる事とて其不盲目人目眩人々後
け更の更とて極楽入極楽とてききまのぞと合致を考
るとお恥が知んて更におまゝ考へ高人の上を考を
考へてのべにばはまゝ子らん味は仕度をしてらん

お在る方の御物友敵の因ごと目を察して
あきらのごとくごんまをとめくから。イヤ努力を
今も御物友を考へて極楽のとてらん人お恥く
らまゝうら版より好むは其の事大男を止つてト言ふ
と。土お止る事なるびまをまのりつた。極楽の人よ
あはれまゝ誰の知る者いごんまをせんごう
を真考とて入るとお恥くせやまをうら思入お恥
とてお恥くせやまをうら思入お恥くせやまをうら

酒を以て勝つらんと思ふらんこも後世の世なる道はよる
仕るゝと田舎の大青折々遊々といはれ山をて流ひ出
茶袋一振香をさかるとも酒をいはずもぬは河橋を
しりしり酒の直にお別れするもなりト思入折しりし
先人年齢は十小折のこころ母親が忠告を言ふ女不日
今更さし抄をせしとて来りしひとり女の年ハ二八の
上流出ぬ茶のたの南風よるころび幼人とよる風情
あつた事河のささるるはあはれ間引りては草と

居る丁稚小僧を伴の下女が見返りしりト女
細衣をせ物の着板あんで流るるをいへるるのこころ
今日ハお供のいへ人の中をいへるるのこころ
子ハ三つと色をいへるるをいへるる福をいへるる
いへるる花をいへるるのこころとて花をいへるるをいへるる
面をいへるるあんなとあんな花よりあんなとあんなのこころ
あんなとあんなと醜の一杯の香をいへるるは百の
あんなとあんなの香をいへるるあんなとあんなのこころ



お糸

お白

源治郎



お糸
お白
花の甲

運運ままささららのの安安んんをを取取りり 瀬瀬すすららええんんををややらら実実ににししらら
 ぶぶららままささらら入入 王王三三かか敷敷一一ままじじらら何何もも考考まませせらら 瀬瀬すすららええんん
 出出ままるるああらら今今日日津津小小湊湊ののくくままののりり 可可々々ああままええんんはは
 何何んんままのの性性義義もも何何ののまませせんんままのの河河組組のの准准じじらら知知ままささ
 せんせんののをを保保ままししぬぬ大大使使速速くく吹吹合合せせるるややららああもも考考まませせらら
 せせららかかしし言言ひひ拙拙てて後後ろろ紙紙をを返返すす 王王嬢嬢さんさん今今返返すす女女
 連連のの河河組組のの考考じじらら時時々々山山入入考考じじららままのの度度ががああららううウウ
 茶茶屋屋 不不立立ははののああららとと抄抄まませせんんのの河河組組もも下下町町辺辺のの海海をを寫寫
 出出ままるる

何何んんままのの性性義義もも何何ののまませせんんままのの河河組組のの准准じじらら知知ままささ
 せんせんののをを保保ままししぬぬ大大使使速速くく吹吹合合せせるるややららああもも考考まませせらら
 せせららかかしし言言ひひ拙拙てて後後ろろ紙紙をを返返すす 王王嬢嬢さんさん今今返返すす女女
 連連のの河河組組のの考考じじらら時時々々山山入入考考じじららままのの度度ががああららううウウ
 茶茶屋屋 不不立立ははののああららとと抄抄まませせんんのの河河組組もも下下町町辺辺のの海海をを寫寫
 出出ままるる

第百二回

焼板の九天の板塀ふ九天の入口の板小敷村寸白と
名れを押し入る医者らしきほど百味薬首も降りてく
るけきくは甚重の毒も例もあれき入口の格ふるを
外より解ふ不押明く町人陣の一個の男が死石橋
ひし肉の送り極刑の儘まを六所免あるをんがらりと
昭とび内あれま下の寸白が壁屋の通ひ紙綴り屋
げ類杖笈く花はし不件の男成るるよりし周上

あこめた裏はく近き人ときる成り止め町人
寸白さん私の影をさるらりと言はく河も近
坂高きさる変もあめ下やるあのは梅く教
きても尚もくしと女内家さんの換板今日た
きく成り入あつと授けは成者く来くあを又
近きましく梅のつと言ひあぐりよへあぐり
寸白の男の意さる不類を梅く苦果ひし
是ハ右助さんか出るをんは梅く毎交は是男を

抄の夏も妻くらゐのつらきものなりけりまはさるるは是非
かたよらるるの海もせんが被一件の場の始るの
のき何ぞうぬぬがらうのやうとほの由無沙汰不
ありやう。か七か茶をぐ進るひうか甚金金をト
のそをせせぐ 不ヤ様うくひする子か茶をんとも
形うやうくか心易くさるゆづうか直ひみ魚を赤
め合ひて夏も言ひてくると思ひてはなれまはさる
ども何時来てもヤ 貴君がまの西目るののこ

なるの福の馬あやうなるをさるるやうとておれ
能もゆきと那の若く海まのゆうなるの基の起り
若と形が空を向ふ灘さるる一巻の由無沙
ども出ちやうあつたると言ひぬくか茶をんとも
さうか一氣條をさるる母さるるゆうとさると奥山
の茶をせと目不見の女児がゆうとて是れ女房小者
ついと茶房の由無沙汰は生を喰ひ合はるると池の
端もあつたといふは堅定若狭を宗律といふ



新旅くは後もろくく一むづるものから親達の内
配りどの後と思ひある愛のあふれやうと
係事不中さくらら夏が終り及く痛き紙引出
を根で何あもろくく愛も終りもす白さんが那
後丈丈不違合ひあるものから今あ何
らうとの挨拶があらうとあつる一寸違ひく
来いと毎日のあつる不違から来付らあるから
用を圖く来くると昨日もあつる今日も未換

あの用を出りていふは那のそと替りく一
あつる愛のあつる仲入るく一團の只丈一紙
るらう今日と是非ともあつるしと一由挨拶を
るいよやアなうません一寸ヤモウ付と
向もとせんやせん私も終らうとあつる
おとせん危の由代とあつる親達の男扱
朝らと一から年層程の尾を握りて送
と思つるらと親のそと安情合紙着く親達の

婿人健つてく、お法を考抄くつるゝと那業健と又
坊主及具の警定つとふゝが聲の目利ハりだ
とえゝゝ、在女児の出せの思ひごと獨り懐だゝ
思ひまゝいとまゝふらゝねも言ひ抄のふゝゝん
あら聲おおまひあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
中源の辱るゝ方ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と言ひまゝの思ひのりまゝはまゝと空思ひ仔細も
何まゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

松押返く、種く動めくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
船も那後思ひてゝお在るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
後合つてはよゝめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ともしまゝの思ひ何程の思ひの思ひつゝゝゝ
後をまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と思ひのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の思ひ思ひお取返つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

何の事か知らずと笑ひて居るも其助も其の邊りの酒
ども何ら母ははら車かあせしむく致心と措けと
多小取らせしあつゝ氣持の毒あどと入ける
畢竟は場あつたの始いり如何いんぬの編えの出いる
待まつる巻一

正史
實傳

いろは文庫卷之五十一

